

鳥取ガス創立95周年記念事業

至高の愛



織田廣喜展

2013 5/24(金) — 6/2(日) 開館 9:30-17:30
(入場は17:00まで/最終日は16:00終了)

入場無料

会場 サルーテ (鳥取ガスグループ ショールーム)

主催 鳥取ガスグループ

後援 鳥取県 鳥取市
新日本海新聞社

講演会『織田ワールドの魅力』角秋勝治 5/25(土)14:00-15:30



リラ夫人(リトグラフ)



アトリエの織田廣喜(2006年 世田谷区上祖師谷にて)

幻想と哀愁の女性像 — 詩心の画家・織田廣喜

敬愛する画家・織田廣喜氏が、昨年5月に98歳で絵筆を置かれた。

しかし「絵の虫」の情熱は、いまでも脈々生きている。

従って本展は回顧ではなく、鳥取ガス創立95周年記念事業「至高の愛-織田廣喜展」と題し、広く市民の皆様にご鑑賞して頂くことにした。

— 天性の詩人画家

「例えば橋の上に、一人の女性がいる。誰かを待ち、もの思いにふけっているのか。恋に破れて、死のうとしているのか」
そこまで思い詰めて描くのが、織田廣喜さんの世界であった。画家にして天性の詩人。ゆえに女性像は、複雑微妙で、両眼も異なり、幻想の彼方にたたずんでいる。

— 太陽と共に描く

「手製の“新居”を建てたが、風に揺れ、5年間は水道・電気・ガスもなく、妻と日が昇れば描き、暮れると眠る原始生活に耐えた」
デビューは戦後の1946年。極限の貧困にも負けず、夫妻は希望を抱いて、太陽の運行と共に生きた。織田ワールドは、そんな人生の哀愁と歓びに満ちている。

— 省略と虚構の美

「線は少なく、間(ま)の余韻を。10本の線を1本で描けば、9本分が想像できる。間とは夢、精神性。間を失った人間は痩せてしまう」
画家は説明を嫌い、画面は省略に徹した。そこに生まれるのは、虚構による豊かな空間と内面の充実。ゆえに「私の嘘は真実である」と言った。織田美学である。

— 逆境の“思想家”

「昔は人間臭かったが、物の余るいまは人間が姿を消しつつある。物事は反対現象に現れるから、私は自分に抵抗し不自由な状態で描く」
経済成長後も、簡素な生き方を変えず、リラ夫人が病に倒れると、看病しながら制作した。私は織田さんを「逆境の思想家」と名付けた。

(文化広報室・角秋勝治)

織田廣喜(おだひろき) 1914-2012

福岡生まれ。10代で個展を開き、県展に入選、18歳で上京。日本美術学校で、藤田嗣治・林武に学ぶ。46年、二科賞受賞。51年に萬宮リラと結婚、妻と二人展を開く。60年渡欧。ドイツ映画『バラライカは鬼が笑う』に出演。国際形象展・国際美術展に出品。野見山暁治らと四人展。82年、リオ・デ・ジャネイロ名誉市民。鳥取大丸で個展の折、砂丘を取材して『ほたる』300号を制作。83年にリラ夫人が倒れ、介護と制作は15年間に及ぶ。95年、恩賜賞・芸術院賞。日本芸術院会員。